

上海から来た女

新庄雄太郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

京都発8時39分特急「雷鳥13号」に乗って野原は能登半島へ旅行に行っていた

ところが、琵琶湖で殺人が起きた、しかし、彼は鉄壁のアリバイがあった

しかし、警察は野原を犯人にされ、警察に連行された、犯行は可能なのか？

東京―横浜―琵琶湖―奥能登を舞台に連続殺人が起きる
ラブライブ！スーパースター!!サスペンス第1弾

目次

第1章	唐 可可	1
第2章	L特急「雷鳥13号」	4
第3章	輪島で殺人	7
第4章	容疑者	13
第5章	事件の背景	16
第6章	行方不明	19
第7章	事件解決	22

第1章 唐 可可

神奈川県・横浜市

彼女の名前は、唐 可可、上海出身の中国人である。

「野原、その子誰だ。」

「ああ、紹介しよう、彼女は唐 可可、結ヶ丘高等学校の高校生だよ。」

「へえ、結ヶ丘、あの私立高校の。」

「うん、俺が原宿へ行った時にその女の子に会ったんだ。」

「なるほど。」

と、南は言った。

「あなたが南さん。」

「ええ、私、南 達仁です、こちらこそよろしく。」

「私、唐 可可です、クウクウと呼んでくださいです。」

「でも、どうして日本に。」

「私のお母さんは日本出身なの。」

「なるほど、それで母と一緒に日本へ来たのか。」

「はい、今年の春からに。」

「ほう、上海からだだと飛行機に乗って来たのか。」

「うん。」

野原はクウクウと親しかったが、ちなみにちよつとかわいい子だな
と思った。

ところが、野原とクウクウは恐ろしい事件が起きるとはだれも予想
はしなかった。

「へえー、上海から来た女か。」

「ええ、その母親は日本出身なんだって。」

「ほう。」

「いわゆる、国際結婚か。」

「そうなんだよ。」

「その女の子はこの学校なんだ。」

「ええ、確か、結ヶ丘高等学校って言ってたけど。」

「えっ、結ヶ丘高等学校か。」

「知ってるんですか。」

「ああ、噂には聞いたことがある、確か学校法人・北斗学園が創設した私立学校だったな。」

「ほう。」

「その女の子はどうしているんだ。」

「ああ、今表参道にいるけど。」

「そうか。」

「なるほど、彼女は東京に移住してきたのか。」

「はい。」

京都から乗った新快速敦賀行は天津京駅に着いた、俺たちは琵琶湖観光する事になった。

「ねえ、私、琵琶湖のミシガン遊覧に乗ってみようと思うの。」

「小海さん、それいいですね。」

その女子旅行仲間たちは、琵琶湖遊覧のミシガンに乗りに来た。

「まあ、琵琶湖ってこんな湖なの。」

「うん、風が強く吹いてるよ。」

「今日は、いい天気だからな。」

南たちは、琵琶湖周辺を散策した。

「おいっ、見て見ろよ。」

「何か人が浮いてるぞ、人魚かな?。」

「ちよっと、行って見ようか。」

旅行友人たちは、琵琶湖周辺の人盛りを見に行って見た、それは男性の水死体だった。

数分後、滋賀県警のパトカーと捜査一課の刑事が到着した。

「被害者の免許証です、東京在住の灰原 春馬さん、30歳。」

「それで、死因は。」

「ええ、詳しいことは報告待ちです。」

「うん。」

そこへ、殺人事件の知らせが入ったのはその翌日だった。

東京駅・公安特捜班

「何ですって、琵琶湖で水死体!。」

「えっ。」

「それで、被害者は灰原春馬 住所は東京都、わかりました、早速調査いたします。」

「班長。」

「おい、滋賀県警かに捜査協力の要請だ。」

第2章 L特急「雷鳥13号」

野原は、唐と一緒に京都から北陸本線経由の特急「雷鳥13号」新潟行に乗って金沢からは七尾線に乗り換えて

野原は輪島へ行く事になった、朝市を見物した後は七尾線に乗って金沢から米原経由で横浜へ帰る事になっていた。

野原の京都と奥能登の旅の日程

1日目 6時30分発 新幹線「ひかり31号」に乗車

8時54分 京都市着

2日目 京都―金沢までは特急「雷鳥13号」に乗車

金沢から輪島まで七尾線に乗車

3日目 金沢から米原経由の特急に乗って横浜へ帰宅

2泊3日で能登へ旅に行く事になった。

ホームに特急「雷鳥13号」が入線して来た。

「オーツ、これが「雷鳥」か。」

「うわー、凄いです、これが北陸本線の特急ですか。」

「うん、この雷鳥はJR東日本仕様なんだ。」

「ほう、これが日本の特急なのね。」

と、唐は言った

「うん。」

ところが、ホームで怪しい男が野原と唐の後を付けていた。

「ファーーン！」

8時39分発 特急「雷鳥13号」は京都駅を発車した。

大阪と富山、新潟を結ぶ「雷鳥13号」は大阪を8時10分に発車し、新大阪、京都、西大津、敦賀、武生、福井、芦原温泉、加賀温泉、小松、金沢、石動、高岡、富山、魚津、黒部、入善、糸魚川、直江津、柏崎、見附、東三条、加茂、新津、終着新潟へは14時49分に到着する。約4時間の旅である。新大阪、京都に止まり列車は湖西線に入り、窓の外に琵琶湖を眺めながら近江塩津駅に通過すると右手から北陸本線の線路が近づいてくる、やがて合体し特急「雷鳥13号」は湖

西線から北陸本線に入る。

金沢駅 11時03分

金沢駅に到着した、野原と唐は能登へ行くため七尾線のホームへ。
「穴水で乗り換えか、そこから輪島へ行くんだね。」

「この七尾線、電気で動くのか。」

「よくわかりましたね、その通り、91年のダイヤ改正で七尾線は電化開業になったんだよ。」

「それで、電車になったのか。」

「おっ、来た。」

野原たちは七尾線に乗り、輪島へ向った。

野原と唐が乗った七尾線は津幡から輪島へ結ぶローカル線である、金沢から津幡までは北陸本線を走る、91年の9月で電化開業により電車化になった、他にも気動車タイプの急行「能登路」も運転されている。

「海が見えてきたわ。」

「うん、結構楽しいわ。」

フーン！

七尾線は穴水に到着した、そこからはのと鉄道七尾線に乗り換えて輪島へ向った。

「ここが輪島か。」

「うわあ。」

輪島温泉・ホテル高州園

「お世話になります。」

「ようこそ、輪島温泉へ。」

「いい温泉ね。」

「うん。」

二人は、旅館に入ってみたら。

「うわー、海がいつぱいだわ。」

「ああ、能登は海が綺麗だからな。」

「本当だわ。」

「うん。」

第3章 輪島で殺人

と、野原と唐と一緒に行って見ることに。

「どうしたの、野原。」

「大変だ、人が撃ち殺されてるんだ。」

「何だって。」

野原と唐が見たのは、それは男性の射殺死体でした。

「どう。」

「やはり拳銃だ。」

「拳銃。」

「うん、これは多分リボルバー拳銃だ。」

「やっぱり、射殺かな。」

「ああ。」

数分後、石川県警のパトカーが到着した。

「石川県警の猪谷です。」

と、警察手帳を見せた。

「あなたが発見者だね。」

「はい。」

「それで、現場は。」

「ここです。」

間もなく、捜査一課も臨場してきた。

「警部、死因は銃殺ですね。」

と、部下の速水刑事が言う。

「それで、被害者の身元は。」

「ああ、被害者は松岡泰士さん、34才だ。」

「おそらく凶器は拳銃、これはリボルバー拳銃じゃないでしょうか。」

「何、リボルバー拳銃。」

「ええ。」

唐は、野原と一緒に能登を巡った。

白米千枚田

「もうすぐ、お米が取れる時期だね。」

「うん。」

「ここは能登でも観光名所何だ。」

「そうなんですか。」

恋路海岸

「ここが、恋路海岸ね。クウクウを撮ってよ。」

「わかってるよ、クウクウ笑って。」

「はい。」

と写真を撮る。

輪島朝市

「こうてくだあー。」

と威勢のいい声が聞こえた。

「結構繁盛してるな。」

「お客さん、今日はとれたてだよ。」

と、干物屋は言う。

朝市の活気がみえる。

「うわっ、海の臭いがするね。」

「ホントだ。」

海産物の試食をする野原。

「野原、ここよく来るの。」

「うん、能登へ行ったら朝市もよろうかなと。でも輪島朝市は初めてなんだ」

「結構大繁盛してるんだね。」

「朝市は、輪島の他にもね北海道の函館や千葉の勝浦や岐阜の宮川で行っているんだよ。」

「そうなんだ。」

そして、千歌はイカの塩辛を試食した。

「えっ、塩辛ッ。」

「アハハ、千歌は辛い物は苦手なんだよな。」

「にぎやかだね、輪島朝市。」

「威勢がいいね。」

「本当だ。」

「美味しそうな魚も売ってるわ。」

「本当。」

「あつ、魚の解体ショーだつて。」

と、野原は言った。

「ちよつと見に行こうよ。」

野原と唐は魚屋を見物した。

「楽しかったわ、能登。」

「ああ。」

「また、あなたと旅したいわ。」

「帰りはどうするの。」

「米原で新幹線に乗って横浜へ帰るよ。」

「そうなの。」

帰りは、金沢から米原経由のL特急「加越8号」に乗って米原から新幹線「ひかり」に乗り次いで新横浜へ帰宅した。

一方、南は琵琶湖で起きた殺人を推理していた。

「これが琵琶湖で起きた殺人だな。」

「はい。」

「使用された凶器は。」

「恐らく拳銃と思われます。」

「拳銃か。」

「ええ。」

「やはり、使用されたのはS Wの38口径ですね。」
「38口径か。」

「犯人は、暴力団の可能性もありますね。」
「ええ。」

第4章 容疑者

「何、野原が殺人容疑で取り調べを。」

と、南は言った。

「ああ、神奈川県警から連絡が会ったよ。」

「それ、本当なんですか。」

「おう、今滋賀県警の刑事が着て調べているんだ。」

「えっ、何だって。」

南は、早速神奈川県警へ向かった。

「おお、南。」

「大下、こればどういう事なんだ。」

「まあまあ、南公安官落ち着いてください、これは任意同行ですから。」

「えっ。」

「琵琶湖で起きた殺人の当日は、野原は能登へ旅行していたと言ってるんだ。」

「えっ。」

「話によると、野原は唐と一緒に京都へ行って、次の日京都から北陸本線の特急「雷鳥」に乗っていたんだと言ってるんだ。」

「えっ、それ本当なんですか。」

「ああ。」

「ほう、京都から特急「雷鳥」に乗った。」

「ええ。」

2時間後、野原は釈放された。

「あつ、南さん。」

「色々聞かれただろ。」

「ああ、やっていないのに疑うなんて。」

「野原、本当に特急「雷鳥」に乗ったのか。」

「うん、確か「雷鳥」は新潟行に乗ったの覚えてるよ。」

南は、特捜班に戻ると高杉班長に報告した。

「えっ、事件当日は京都から特急「雷鳥」に乗って金沢へ行つたと言っています。」

「なるほど。」

小海は早速、時刻を調べて見た。

「えーと、えーと、雷鳥の新潟行と、あつたわ。」

時刻表を見て見ると。

4013M雷鳥13号

大阪 8:10

新大阪 8:15

京都 8:39

西大津 8:48

敦賀 9:34 9:35

武生 10:01

福井 10:09 10:10

芦原温泉 10:21

加賀温泉 10:33

小松 10:43

金沢 11:01 11:03

石動 11:19

高岡 11:29 11:30

富山 11:41 11:45

滑川 11:59

魚津 12:05 12:06

黒部 12:12

入善 12:21

糸魚川 12:45 12:46

直江津 13:11 13:12

柏崎 13:34 13:35

長岡 13:59 14:00

見附 14:08

東三条 14:17

加茂 14:24

新津 14:37

新潟 14:49

「ああ、確かにね。」

「ええ、1日目は京都へ行っていたと言っています。」

「それ、本当か。」

「はい。」

「彼は京都へ行っていた事が分かりました。」

「なるほど。」

「帰りは金沢で米原経由の特急「加越8号」に乗って新横浜に帰ったと言っています。」

時刻表を調べて見ると。

加越8号

金沢発 13時22分

小松 13時40分

加賀温泉 13時49分

芦原温泉 14時00分

福井 14時12分

鯖江 14時21分

武生 14時26分

敦賀 14時48分

長浜 15時16分

米原 15時22分

「そうか、米原だと新幹線「ひかり」と連絡しますから乗ることしたら何時だ。」

「調べて見ると、米原からだとも15時29分発の「ひかり246号」に乗れば新横浜には17時31分、東京へは17時49分に到着します。」

「これで、アリバイは成立ですね。」

「ええ。」

第5章 事件の背景

野原の旅は、石川県警に捜査協力を得ることにした。
野原の旅は次の通りだった。

1日目 6時30分発 新幹線「ひかり31号」に乗車

8時54分 京都着

2日目 京都―金沢までは特急「雷鳥13号」に乗車

金沢から輪島まで七尾線に乗車

3日目 金沢から米原経由の特急に乗って横浜へ帰宅
「アリバイ成立ですか。」

「ああ、確認している。」

調べた結果、輪島の旅館にはチェックアウトされていたことが確認された。

「初日は京都へ行ってたのか。」

「ええ。」

「三千院と二条城へ行ってたそうです。」

「ほう、なるほど。」

「それで。」

「今、桜井と高山が京都で確認へ行っている。」

「そうか。」

一方、高山と桜井は新幹線「ひかり207号」に乗って京都へ向かった。

二条城

「おお、この2人か。」

「知ってるんですか。」

「ええ、観光されていましたよ。」

「そうですか。」

京都市内のホテルにて。

「ああ、その二人なら昨日泊まりましたよ。」

「えっ、本当ですか。」

「ええ、昨日でチェックアウトされています。」

「そうですか。」

そして、高山と桜井は東京に戻り、高杉班長に報告した。

「そうか、初日に京都へか。」

「はい、確認取りました。」

「裏付けありか。」

「ええ。」

「ホテルと二条城の職員にも確認したが、やはり二条城へ観光した後
はホテルで1泊されています。」

「そうか、高山、桜井、ご苦労さん。」

「はい。」

そこへ、高杉がやって来た。

「どうだった、南。」

「ええ、野原と唐は初日に京都へ来ていたのは確かだ。」

「そうか、琵琶湖へは無理か。」

「ええ。」

次の日、南は横浜で野原に会った。

「えっ、クウクウが。」

「うん、何か話したい事あるって。」

「とにかく、公安室に来てか。」

「うん。」

南は、野原と唐と一緒に、東京中央鉄道公安室へやって来た。

「えっ、行方不明。」

「ええ、一昨日から行方が分からなくなったの。」

「それで、警察の方は。」

「いいましたよ。」

「それで、その人の特徴は。」

「はい、これが特徴です。」

「なるほど、わかりました、早速、捜査するよう取り計らいます。」

南は、高山と小海と一緒に行方不明の捜索をすることにした。

「えーと、名前は唐の母の友人で里見 菜穂子さんか。」

「なるほど。」

「でも、琵琶湖と奥能登の殺人の方は。」

「大丈夫だよ、桜井と松本に任せるから。」

「そう。」

「なら安心ね。」

「よし、早速、能登へ行こう。」

「ええ。」

南は、高山と小海を連れて上野から23時03分発の寝台特急「北陸」に乗り、能登へ向かった。

第6章 行方不明

6時31分、寝台特急「北陸」は金沢に到着した。

「金沢で七尾線に乗ったのは確かですね。」

「ええ。」

「とにかく、搜索するぞ。」

「はい。」

そして、七尾線に乗って穴水へやって来た。

「この辺で降りたんじゃないかな。」

「ええ。」

「とにかく、聞いてみましょうか。」

「小海、頼む。」

「はい。」

小海は、タクシードライバーに聞き込みをした。

「ああ、この女性なら知ってますよ。」

「本当ですか。」

「ええ、この駅でスポーツカーに乗った男と一緒にだったよ。」

「あの一、何歳位の人でした。」

小海はタクシードライバーに聞いた。

「さあてね、42歳ぐらいの男だったよ。」

「そうですか、それでスポーツカーの特徴は。」

「ああ、確かシボレーのカマロで色は赤だったな。」

「うん、赤のシボレー。」

聞き込みの結果、失踪した里見は赤いシボレーに乗って走り去ったことが判明された。

「えっ、赤のシボレーに乗った男が里見を乗せたって。」

「うん、タクシーの運転手が言ってたわ。」

「そうか、その男を調べないとね。」

南は、すぐに高杉班長に報告し、桜井達にその男の捜査してくれと頼んだ。

「何、南が能登へ。」

「うん、とにかく調べて見てくれ。」

「わかったわ。」

「よし、わしも手伝うぞ。」

と、菅原は言った。

早速、時刻表で菅原は調べることにした。

一方、桜井は松本と一緒にシボレーの男を追う事になった。

「えっ、またあんたか。」

「すいませんが、この女性をご存知ですか。」

「あの女は、輪島で降りた後はその後は知らんな、又俺を疑ってるのか。」

「あ、いや、そう言うわけじゃなくて。」

「又しつこく来たら、プライバシーの侵害で訴えるぞ。」

と、言つて男はドアを閉めた。

「何て、人なんだ。」

「ああ、この人怪しいな。」

「ええ、何か隠しているかもね。」

一方、菅原は。

「よし、わしの出番だな。」

「えーと、男は。」

時刻表を見て見ると。

7時44分 新横浜で新幹線「ひかり205号」に乗車

9時54分 米原で下車

9時57分 特急「しらさぎ3号」に乗車

11時53分 金沢で下車

「ん、待てよ、奴が琵琶湖へ行つたとしたら米原からだったら新快速があるじゃないか。」

9時58分 琵琶湖線に乗車

10時09分 長浜着

11時12分 長浜発

11時50分 敦賀着

「敦賀から北陸本線に乗った。」

12時02分 敦賀発特急「スーパー雷鳥19号」に乗車

14時34分 和倉温泉着

「そこから、七尾線に乗りかえた。」

と、菅原は時刻表で等を解いた。

「わかったよ、桜井、松本。」

「本当か、それ。」

「ああ。」

第7章 事件解決

「これで、奴のアリバイは崩れたわ。」

「うん、これで逮捕は出来る。」

「と言う事は、まだ能登にいるって事か。」

「そう言う事だ。」

「じゃあ、唐と母の友人は。」

「ああ、恐らくな。」

そこへ、石川県警の小沢警部がやって来た。

「あなたが、唐 可可ですね。」

「はい、そうですが、あなたは。」

「私は、石川県警の小沢です。」

「あなたのお母さんの友人を捜索してるんですか。」

「はい、一昨日から行方不明になって、公安の人にお問い合わせしたんです。」
「なるほど。」

南と高山達は、石川県警のパトカーに乗り込み、能登金剛へ向かった。

「おっ、こ、これは。」

「何と。」

「若しかしたら、可可の母の友人か。」

「うん。」

小海は、里見を救出した。

「大丈夫ですか、しっかりしてください。」

「えっ、あ、あなたは。」

「東京中央公安室の公安特捜班です。」

「間違いない、捜索願の里見だ。」

と、高山は言った。

「おい、誰だてめえは。」

「鉄道公安隊だ。」

「やはり、お前が。」

「その通りさ。」

「琵琶湖と能登で殺害し、里見を拉致した。」

「悪いが、お前を生かしておけないな。」

と、中里はリボルバー拳銃を取り出した。

「死ねーッ!。」

バキューン!

と、1発発砲した。

高山は、1発発砲した。

「ぐはっ。」

と、肩に命中。

「観念しろ、中里。」

と、南は手錠をかけた。

「いやー、危ないところだったな。」

「ええ。」

「これで、野原の無実が証明されたな。」

「ええ。」

「後は、犯人が分かればな。」

石川県警察本部

「えっ、もう1人の犯人がわかったって。」

「ええ、今桜井と松本でマークしている男の身元が分かったよ。」

「それ本当か。」

「ああ、名前は二宮 大輔、35歳だ。」

「あっ、この人が。」

「ああ。」

「今、桜井と松本と菅原が追っている。」

そして、桜井は松本と一緒に二宮の逮捕へ向かった。

「二宮大輔、お前を殺人陽気で逮捕する。」

と、松本は二宮に手錠をかけた。

そして、次の日。

「ありがとう、これで無実が証明されました。」

「よかったな、野原、疑いがはれて。」

「うん、これも特捜班のおかげですよ。」

「いえいえ、それほどでも。」

そして、唐 可可は結ヶ丘高等学校へ通っていた。

「クウクウちゃん、楽しそうだね。」

「ああ。」

「野原も横浜で楽しくやってるかな。」

「ああ。」

「それで、南さんは鉄道公安って大変なんだろう。」

「ああ、乗客の安全を守らなきゃならないんだ。」

「そうなんだ、危険な仕事なんだ。」

「うん。」

野原は鉄道公安隊は危険な仕事なんだなと感じました。